

85 大阪 05 奈良 15 みのお

—全国大会は支部に何をもたらしたか—

前田 雅章（相愛大学）

1. 土台は 1985 年大阪全国大会

大阪支部は結成の 1971 年から 1985 年大阪全国大会（以下「85 大阪」）開催までの 14 年間で、ほぼ支部の研究、組織、運動体制が作りあげられた。一言でいうと土台は 85 大阪でつくられ、それを 2015 年みのお全国大会（以下「15 みのお」）まで大切に引き継いできた。

この「全国大会を振り返る」では、まずは 3 大会で引き継いできたものや共通点を上げ、次に各大会の特徴を述べたい。

2. 引き継がれたもの、引き継いだもの

（1）情勢分析しメッセージを発信

大阪支部は、大会テーマをはじめ基調提案、記念講演などで、憲法と 47 教育基本法、そして同志会「私たちの誓い」の精神を軸に、その時々々の社会や教育情勢を分析し、自らのメッセージを発信してきた。

また、85 大阪の大会テーマ「平和を守り、自治をはぐくみ、すべての子どもを運動文化の主人公に育てよう」に代表されるように、同志会創立以来 30 年、日本の敗戦、被爆 40 周年に当たることを念頭に「平和を守る」ことを強くアピールした。

85 大阪は「一口に言えば同志会の 30 年と教育臨調に対決する大会」(注1)と位置づけられ、開閉会式の記念講演で二宮厚美（当時大阪外国語大学）と高浜介二（当時大阪教育大学）が、教育臨調の分析とそれに対抗する教

育運動について語っている。

2005 年奈良大会（以下「05 奈良」）当時、小泉政権下による憲法・教育基本法「改悪」の策動に対抗して、2004 年「9 条の会」の設立、スポーツ分野も「スポーツ 9 条の会」が発会され、憲法・教育基本法「改悪」反対の運動が広がってきた。

この運動に連帯し 05 奈良の大会基調提案では「平和とスポーツ」について論究。また、開閉会式では、「イラクの子どもたちは今一映像で見るイラク」西谷文和（イラクの子どもを救う会）と「表現する人々—これからの日本と教育—」小森陽一（東京大学・9 条の会事務局長）の二人が、平和の危機と今後の展望について講演した。これは「9 条の会」の活動と連動する企画と内容であった。

15 みのおは、「大阪府教育基本条例」が制定され教育に強制と競争の仕組みが持ち込まれた社会情勢下で開催された。これに対抗する教育運動「どっこい生きている！」を合言葉に、①戦後 70 年同志会 60 周年を、「これから」を切り開くための大会。②震災後の「長久手—あわじ—みやぎ」を受け継ぐ大会。③大阪からの発信として「悪政からの反転を展望」できる大会。これら三つをテーマに掲げ全国大会を開催した。

（2）推進講座と記録化

次に大会開催に向け現地実行委員会の学習会「大会推進講座」を実施したことだ。「このような学習を計画した動機は、準備委員会を含め 2 年間の実行委員会活動を常に活性化し、

継続的なものにしたかったこと、もっと直接的に毎月の結集の目玉が必要であったこと。・・・内輪の例会や学習会ではなかなか取り上げることができない、我々の近視眼的な視野の外側にある大きな問題を取り上げることになった」(注2)。「推進講座の目的は、大会実行委員が大会運営を単に実務レベルに押しとどめず、教育全般やさらに政治・経済・文化とマクロ的な視野から学習を積むことで、自らの国民的教養と教師としての専門的力量を高めることである。これは大会後の支部の組織的な研究活動や各個人の教育実践に豊かな影響を与えるだろう」(注3)。「今の教育現場は多忙である。そして情報化社会。教員の多くは教材をつくるより教材をネットで探すことで凌いでいることが多いのではないか。そのような手軽さ便利さよりも、泥臭くても本質を追求する同志会魂に共感した若者はきっとこれからも、こだわり実践を続け発信し同志会の新しい担い手になってくれるだろう。・・・推進講座はそのような意図で内容を企画している。実践を考える時、幹となる思想、実践における中心的課題など、それらの学びが研究推進の一助けになればと考える」(注4)。

推進講座は、85 大阪 19 回、05 奈良 16 回、15 みのお 15 回、開催された。それらは、大阪大会推進講座講演集「主体者形成 I」、2005 年奈良大会「推進講座記録集」、「KICK OFF」第 43 号第 44 号に記録化されている(注5)。85 年大阪以降、この推進講座方式は他支部開催の全国大会にも採用され現在に至っている。

(3) 大会全体の基調提案と研究テーマ

大阪支部は大会を開催するにあたって三大会とも大会テーマや研究テーマを全国常任委員会と共同して創り上げてきた。

85 大阪では、「主体者形成」をテーマに「臨教審答申」の分析とその対抗する同志会の教育運動を全国研究局長唐木國彦に語らせてい

る。唐木は全体基調提案で「大阪支部は大会運営の組織活動を組織建設のきっかけにしている」と評価し、大阪支部が創ったポドテキストを引いて「スポーツの主体者を育てる道筋は平和への道筋に結びつくことを確信」(6)と結んでいる。

また、大阪支部の全国大会研究への関与はこれだけではない。事前に分科会運営と実技指導案を各分科会運営者に依頼、それを印刷、作成し、大会当日全参加者配布したことがあげられる。これは画期的な事で、今でもその指導案集は分科会運営や実技指導の参考になっている。

05 奈良では、基調提案作成委員会に大阪支部の安武一雄が加わり、第 5 章「これからの実践へ—一つの提起—」を執筆し、大会の基調提案報告も安武が行った。

15 みのおでは、基調提案作成は大阪支部が全責任を担った。研究者の丸山真司(愛知支部)の支援もあったが、現場教師が全国大会の基調提案作成を担うのは大会史上初めてのことである。当日の基調提案報告は執筆者の一人である川淵和美が行った。

(4) 大会速報を重視 研究と生活の統一

85 大阪の速報のタイトルは「御堂筋」で 32 号発行された。もちろん手書きである。速報編集長の武藤紳一郎は次のように述懐している。「大会速報は過激な業務だった。3 夜連続で平均 2 時間程度の睡眠だった。これは褒められた活動ではない。スタッフに体調を壊したものもあり深く反省している。これまでの速報最多号数であったが質を高めて号数を減らす努力も必要だったかもしれない。とにかく初めての経験でがむしゃらだった。しかし、上方文化や食文化、平和についても触れたり、開催期間中に発売されている大衆紙に中村敏雄氏の著作が紹介されているのを見つけて転載するなどタイムリーでホットで楽しめる紙

面づくりをめざした」(7)。

大会中の8月9日の記事には長崎被爆40周年が取り上げられ「共産党が弾圧された。私は黨員でないからじっとしていた。学校が、図書館が、労働組合が弾圧された。やはり私はじっとしていた。教会が迫害された。私は牧師だから行動に立ち上がった。だが、その時はもう遅すぎた」(マルチン・ニーメラー1984年3月6日ドイツで死去)を紹介している。

なお、この速報以外に分科会報告集も作成されている。分科会参加者の一人が分科会のまとめを「文化交流のタベ」(以下「大レク」)終了後に執筆、それらを回収、印刷して翌日に参加者全員に配布した。当時の全国大会ではこの運営スタイルが常であった。分科会まとめ執筆者も大変な作業だったが、酔っぱらった人たちから、そのまとめの回収は非常に困難であり、さらに大レク後に印刷と冊子化を行っていた。しかし、これらの作業をいとわずできたのは、この大会は「研究」大会であるという自覚と矜持があったかもしれない。

05 奈良の速報タイトルは「まほろば」。62号まで発行された。ワープロ打ちで写真も多用されている。この速報を編集長の辻内俊哉は、翌年2006年大阪支部創立35周年記念「大会速報集」として製本した。辻内は「大会期間中研究の成果を共有し運営がスムーズになることを期して大会速報『まほろば』を未だかつてないボリュームで発行しました。今回、大阪支部結成35周年の節目を迎え、ぜひ、当時の研究成果を紹介し、奈良で同志会が精力的に活動した記録を歴史の一ページに刻みたい」(8)。と記したように、この「まほろば」は、速報と大会研究部の分科会研究のまとめの合作となっている。

大会研究部は、当時の若手を各分科会に配置し、分科会の実務的な世話係としてだけでなく、その都度の分科会の提案や検討内容をまとめて速報「まほろば」に掲載することに

した。速報が参加者の感想文だけでなく研究討議内容の流れも把握できるようになっていて、辻内が言うように「未だかつてないボリュームで発行」できたのである。

15 みのこの速報編集長は窪田浩尚。速報タイトルは「ひっしのパッチ」(「必死のパッチとは、関西で「一生懸命する」ことの最上級語です。パッチのいうのは「必死」を強める語で、これ以上ないほど頑張ることを意味します)。この速報づくりの特徴は、ネットを十分に活用したことである。「同志会メール」で分科会での参加者の感想や写真を即座に送るシステムを構築した。速報編集部の部屋にはWi-Fi環境が整い、編集部員各自がパソコンを持ち込み各分科会から送られてくるメールを編集して紙面づくりを行った。編集部員の藤沢岳矢は、TwitterやFacebookなどのSNSで発信を続け参加者以外からの大会への反応もあった。

当初、窪田は「速報なんかなくてもいいのではないか、という思いが自分の頭の片隅にあった」。しかし「大会参加(生きていくため)に一見必要ないものにみえても、‘そんなもの’ほど豊かにしていくことこそ文化という意見を聞き、胸を打たれた。・・・この大会で感じたこと。それは『編集こそ文化』である。『すべての参加者(子どもたち)に豊かな速報(運動文化)を』である」(9)と大会の速報編集活動を総括した。

以上のように三大会の速報の紙面づくりにはそれぞれの特徴はあるが、一貫しているのは研究会としての研究や学習の内容の重視と開催地の町案内や文化の紹介など、コラムで‘遊びどころ’も大切にしていることだ。これは同志会の伝統である研究・学習と生活を統一した大会運営に通じるものがある。

しかし、残念ながら近年の他支部主管の大会運営では、実務的に負担が大きいということで、この速報の発行を縮小、または無くす傾向にある。

同志会の大会は「研究」大会である。そしてこの研究を広げるといふ「研究」運動でもある。私は、85年大会で大レクの後でも、執筆、編集、印刷する先達を見て同志会は真の研究団体であると確信した。速報がない大会は「研究」といふ看板を外した方がいいかもしれない。

3. 85 大阪の熱量と「市民権」

1985 年はバブル経済の真ただ中であつた。この年阪神タイガースが 2 リーグ制になってから初の日本一を達成したシーズンである。大阪の街は狂乱し道頓堀川に飛び込む輩が続出した。1989 年の日経平均の株価は 3 万 8900 円に達した。こうした経済や時代背景がどれだけ教師の生活、文化、そして生き方に反映したか不明だが、とにかく、実行委員の平均年齢は 30 歳前半。若いエネルギーが炸裂した熱量は半端なものではなかつた。

常に同志会の全国大会は研究と生活が統一されたものが要求されるが、85 大阪は、研究体制の充実だけでなく生活についても後年語り草になるエピソードが多々ある。宿舎「大野屋」ビアガーデンのビールを飲みつくした。大レクに向けてのレクリエーション担当者会議が 2 回も持たれ、分科会の一コマは出し物の練習まで行った。その大レク会場は難波キャバレー「味園」で、始まる前から酔っぱらった参加者が他の人とトラブルが心配された。「難波の『500 人宴会場』『味園』で行われた大レクはすごかつた。50 台の円卓に 10 人で定員 500 人のはずだが明らかにそれ以上いた。13 人～14 人座って 650 人以上はいたと思う。(しかし、料理は 500 人分で・・・不足分は持ち込んだ) 速報の仕事片付けて会場に駆けつけるとテーブルにはすでに料理が全くなかつた」(10)。等など。

開閉会式は中之島中央公会堂。速報は「御堂筋」。大都会大阪の経済、社会の中心に、大

胆にも同志会の研究大会を、体育科教育を打ち出した。当時全国委員長の永井博は「私にとって、大阪大会で最も心に残っているのは、中之島公会堂です。ここは戦前、労農党の代議士山本宣治が、治安維持法改悪に反対するため大阪を立つ日、演説をした場でした。公会堂に入った時、『山宣一人孤塁を守る』の声が聞こえた(?)。戦前の自由を守るたたかいつながった、そんな思いがしました。その公会堂を会場に、閉会集会が行われました。感動でした」(11)と当時の思い出を語っている。

実行委員長の榊原は 85 大阪を次のように総括した。「研究・組織・財政・出版・・・全面現地開催とはこのような事であり、これは地域社会の中で『同志会が市民権を得る』(黒井) 活動の展開であつた」(12)。「『地域の教育力の回復が叫ばれている中、企画・組織・運営の全てを現地がやり切つた』(同志会ニュース NO.134)」という意義を持つ大阪大会を私たちは成功させた。先日の全国常任・ブロック委への総括報告の折も『今後の大会運営のモデルケース』との高い評価がなされた」(13)。

85 大阪は、地域社会の中に「同志会が市民権を得る」ように、現場教師の集まりである大阪支部の研究と組織が、全国同志会に、または研究者たちに、その存在の大きさを見せつけ「市民権を得た」大会であつたと思う。

4. 05 奈良と 04 関西ブロック研究大会

2001 年の同時多発テロからイラク戦争へという世界情勢と小泉政権で改憲の動きが激化、それに対抗する「9 条の会」が 2004 年に発足という日本の社会情勢の下、「2002 年 11 月 15 日、第 1 回全国大会実行委員会開催。50 年を刻む運動文化論を深化、発展させてきた同志会にふさわしい規模と内容の記念大会にしたい。そして、平和憲法・教育基本法が危機に瀕している今こそ、同志会の『私たちの

誓い』を再確認し発信したいという思いでスタート」(14)を切った。実は、その1年前から大阪支部主管の全国大会開催は決まっていた、4年という長い期間をかけて開催準備を進めてきた。同志会創立50周年という同志会全体としても大きな節目で、全国常任委員会からも大阪支部への期待も高かった。また当時の常任委員会のメンバーも85大阪の研究、組織、運営を乗り越えた大規模な大会にしたいという強い思いがあった。

大会開催地選びは難航したが奈良に決定した。会場は、功刀俊雄が勤務する奈良女子大学とその附属中高、宿舎近隣の小学校が借りられること、宿舎は分宿になるが近辺に集まっており会場へのアクセスがいいこと、そして大規模な大レクができるホテルの大披露宴会場を押さえることができたこと等、85大阪を意識した「生活」と「研究」一体型の大会実現可能と判断した。また、奈良支部立ち上げという同志会の組織拡大も念頭に入れた奈良開催であった。

同志会創立50周年記念にふさわしい大規模な大会開催には、関西近畿ブロック各支部の協力・共同が必要だった。そこで、05奈良の前哨戦として、前年2004年には大阪支部大会ではなく関西近畿ブロック研究大会(プレ奈良大会)を開催した。記念講演は出原泰明「教科体育の独自性と学校体育の役割」、全体基調提案は奈良ブロックの牧野満「今だからこそ大切にしたい体育の『わかる』こと」。そして、関西近畿ブロック各支部のメンバーが分科会提案などを担った。

大会編集部長の辻内俊哉は、このプレ大会を厳しく分析し課題を明らかにしながらも「かなりの手ごたえがつかめた」(15)と05奈良開催への自信を深めた。なお、これ以降、関西近畿ブロック各支部の大会開催について共同の機運が高まり相互援助しながら大会開催に臨むことになる。また、毎年2月開催の関西近畿ブロック研究集会も盛況になった。

同志会創立50周年記念大会企画の目玉として「囲む会」を設定した。「囲む会」とは、同志会第一世代の荒木豊、川口智久、その世代に続く、出原泰明、堀江邦昭、大貫耕一、高田敏幸、堤吉郎、大宮とも子、岨和正、平野和弘、中村ひとみ、進藤省次郎、山内基広、小山吉明、星野実、中川孝子、榊原義夫、進藤貴美子と、同志会の研究と実践をリードしてきたメンバーを囲み、各分野の研究や実践について膝を突き合わせて語り合うのである。今改めて振り返っても、超豪華な講師で50周年にふさわしい企画と内容だった。宿舎の畳敷き部屋で行われ、まさに膝を突き合わせての「囲む会」となった。

また、市民に開かれた研究大会というコンセプトで市民水泳教室を開催。大阪支部の楠橋佐利、中川豊など大阪支部のメンバーが、同志会の財産である「ドル平」を子どもたちに指導した。成果は抜群で子どもたちはみるみる上達し笑顔で帰路についた。この様子を奈良新聞が取材し大会中の朝刊に写真入りで掲載した。

奈良開催と大会運営については、他支部から、「同志会創立50年という節目の年にこの奈良で大会を開催した実行委員会の英断に拍手を送りたい」「若い人が前面に出て大会を運営し、古い？人たちが目立たず、しかし確実に裏方の仕事をこなして盛り上がった。暑い暑い夏の奈良大会の特集号です。・・・大会に参加したゼミ生の一人が『こんな研究会は初めてです。・・・とにかく熱い教師の集まりですね。本当に勉強になり先行きが見えにくく矛盾に満ちた日本の保育・教育に一筋の明かりが見えた気がします』と話してくれました」(16)と高い評価を得た。

なお、85大阪を主導した榊原、上田、小池、前田佳三は縁の下の力持ちとなって05奈良を支えたことを記しておきたい。

5. 15 みのお 若い力の台頭

「2015 年の全国大会は大阪で開催します！」。この固い決意を大阪支部常任委員会は高らかに宣言した。東日本大震災から 2 年もたたないのに、2014 年に宮城支部が全国大会を開催する。宮城支部の雄姿に熱いものを感じた。しかしそれに続く 2015 年全国大会の開催地は空座であった。一方、大阪をめぐる情勢は厳しさを増し大阪独自の「教育基本条例案」が出され、ますます上意下達の教育体制、管理体制が固まりつつある。「私たちはこのまま流されて行っているのか！何かできることはないのか？」。そう問うた時、私たち教員一人一人がしっかり教育に向き合い本当に大切なものを見つめる力をつけることが必要で、私たちは学びを深め実践者、研究者として力をつけなければ……。そこで 2015 年大阪大会に名乗りを上げることにした（17）。

05 奈良以降、若い教師たちが同志会の例会に参加、入会するようになってきた。15 みのお前後の社会情勢は安保保障関連法案に反対する SEALDs の若者の運動が盛り上がり従来の反対運動とは別の国民的うねりが生まれていた。そうした若者の力と呼応するかのよう同志会内にも日名大悟を中心に若者学習会「あつまろ会」「全国若者会議」（18）が結成された。この取り組みの延長線上に、15 みのお直前に開催された同志会 60 周年記念集会「同志会の未来を語る若者シンポジウム」があった。関西近畿ブロック各支部の若手 5 人がシンポジストになり熱く同志会を語り合った。その後の 60 周年記念レセプションは全国各地から 150 人が集まり大盛況のなか同志会 60 周年を祝った。

こうした若者の繋がりとはベテランとの共同の力が 15 みのおに結集したと言える。大会企画局長の日名は「各ブロックやプロジェクトで鍛えられた若者が企画局員に集まってくれたということ。10 名全員が 20 代、30 代であ

る。・・・そんな若者の発信する企画に歯に衣着せず注文を付ける 5 役・常任・実行委員の方々の存在があること。・・・この組織であれば必ず素晴らしい企画が具体化できる」（19）と大会成功を確信する。安武も「つくろうや！『わかって・できて・学び合う』体育・健康教育実践一」作成過程で「実はここまで来るのに、若手会員の執拗なまでの『ダメだし』があったからなのです。実はこのことが大会までの展望を何より開いてくれる」（20）と若者の力を感じている。

実際に、大会基調提案作成委員会に若手の川淵、日名、朝輝千明が入り執筆者となった。また、日名は記念講演者の依頼と交渉、朝輝は例年困難である実技会場確保に奔走した。さらに彼ら以外にも多くの若者が、研究局、企画局で活動し大会を盛り上げた。もちろん 05 奈良の主軸だったベテラン、中には退職したメンバーも駆けつけ大会運営を裏から支えたことは言うまでもない。大会終了後実行委員長の内は「実行委員会には常に 30 名を超えるメンバーが揃い精力的に会議をすることができた。特に若い世代が精力的に集まり新しい息吹が生まれた」と総括した。

6. 組織が人をつくる

3 大会の軌跡をふり返ってみると、北アルプスの八ヶ岳の頂上赤岳から、峰を乗り越え岩場をやり過ごした自分の足跡を見るようだ。大阪支部のメンバーは、日々忙しい教員生活で困難も多々あったが、よくぞここまでやってきた感がある。これができたのは集団で研究組織体制を創り上げ、それを新陳代謝しながら維持発展させてきたからだ。

「存在が意識を決定する」と言う。組織という「存在」が大阪支部にはある。現事務局の日名は「研究活動を支えるのは大阪支部という大きな組織（事務局・研究局・編集局・各ブロック、各プロジェクト）の存在抜きに

は語れません。この組織がなければ忙しさに負けてサークルは・・・実践もなくなるのではないのでしょうか」(21)と10年以上の前にも語り、その組織が日名の「意識」を創り、今も健在だ。

ただ、この組織体制がずっと順調に進んできた訳ではない。新採用がほとんどなく例会には人が集まらない「サークル冬の時代」もあった。だが頑なに各種会議や例会を流さず、支部ニュースや KICK OFF を発行し続けた。それが大量採用時代になり若い人たちが集うことに繋がった。大阪支部は組織化された「近代的サークル」で、ここに大阪支部の強みがある。3 大会を成功させたのは、支部大会開催を各ブロックが持ち回り主催し、各支部会員が組織活動の実践力量をつけたからだ。この土台があるから研究に向かうことができた。

体育の授業は、教室でする他の教科と違って一人で実践できない。運動場の体育は公開で、合同体育、水泳、運動会などは学年の教師へ働きかけと合意形成が重要だ。成文化されずとも自分の「教育課程」から「学年への教育課程」、そして「教育課程づくりを核とした学校づくり」の視点を常に持ち合わせなければならない。こうした職場づくり、学校づくりの組織力は、支部の組織活動で養われたのではないだろうか。

大阪支部は、集団で組織、学習、研究、発表、実践検討、報告、記録化を行ってきた。そして集団で実践の成果と子どもの成長を、ともに喜び合ってきた。それが爆発的に発揮できたのが、「15 大阪 05 奈良 15 みのお」の三大会であったように思う。

【注】

(1) 榊原義夫『主体者形成への道Ⅱ・第二集刊行にあたって』1986年5月31日

(2) 榊原義夫『主体者形成への道Ⅰ・はしがき』1985年8月8日

(3) 前田雅章『2005年奈良大会推進講座記録集・はじめに—大阪支部にとっての推進講座—』2005年

8月7日

(4) 辻内俊哉『KICK OFF・60周年記念 2015 大阪・みのお大会に向けて』第43号 2014年12月20日

(5) 全推進講座から8大阪では6講座、05奈良では5講座の全文をテープ起こし収録。15 みのおでは、全15講座の要約を掲載。

(6) 唐木國彦『85 大阪大会提案集基調提案』1985年8月

(7) 武藤神一郎『大阪支部ニュース No. 324・85年と私の想いで』2004年1月

(8) 辻内俊哉『学校体育研究同志会全国研究大会(奈良大会)大会速報集・はじめに』2006年7月15日

(9) 窪田浩尚『KICK OFF・編集こそ文化～すべての参加者に豊かな速報を～』第44号 2015年12月

(10) 小池深志『大阪支部ニュース No. 325・85年大阪大会と私の思い出』2004年2月

(11) 永井博『OSBG' Z 会だより・多様性の中に、一つにまとまるものを作り上げ続けてください』2021年6月号

(12) 榊原義夫『大阪支部ニュース No. 122・巻頭言』1985年7月

(13) 榊原義夫『大阪支部ニュース No. 123・巻頭言』1985年8月

(14) 前田雅章『たのスポ No. 185・巻頭言』2005年11月号

(15) 辻内俊哉『大阪支部ニュース No. 331・巻頭言』2004年9月

(16) 愛知支部『たのスポ No. 185・編集後記』2005年11月号

(17) 『大阪支部ニュース No. 433』2013年12月

(18) 大阪支部「あつまろ会」2011年。「全国若者会議」2011年9月発足。実践集づくりと全国大会での若者交流。2017年には実践研究宿泊合宿

(19) 日名大悟『大阪支部ニュース No. 450・巻頭言』2015年6月

(20) 安武一雄『大阪支部ニュース No. 444・巻頭言』2014年12月

(21) 日名大悟『大阪支部ニュース No. 400・400号企画』2010年12月

	1985大阪大会	2005奈良大会	2015みのお大会
大会テーマ	平和を守り、自治をはぐくみ すべての子どもを運動文化の主人公にそだてよう	平和と環境を守り、自治をはぐくみ すべての子どもにゆたかな運動文化と生きる力を!	すべての子どもたちに豊かな運動文化を 一つくろうや! 「わかって・できて・学び合う」 体育・健康教育実践一
記念講演者	「教育改革と地域の教育力」 二宮厚美 (大阪外国語大学)	「イラクの子どもたちは今 一映像で見るイラクー」西谷文和 (イラクの子どもを救う会)	「体育・スポーツのこれまでとこれから 一今こそ、日本の体育・スポーツ界の体罰問題を乗り越え、豊かな運動文化に飛躍させる時 一」 森川 貞夫 (日本体育大学)
	「子どもが育つ力、子どもを育てる力」高浜介二 (大阪教育大学)	「表現する人びと 一これからの日本と教育一」小森陽一 (東京大学・9条の会事務局長)	
特別講座	10講座	特別講座6講座 語る会18講座	8講座
参加者 (内大阪)	822人 (290人)	745人 (289人)	523人 (176人)
大阪支部会員数	161人	162人	123人
子ども学校・保育	「うりんぼ学校」41人	「ならまち子ども探検隊」50人	「OSAKA子ども冒険倶楽部」24人
保育	「いちょう」8人	「バンビ」3人	「もんちっち」6人
刊行物	「主体者形成の道」Ⅰ Ⅱ 「KICK OFF」創刊号	「KICK OFF」第35号大会開催記念号 「まほろば」大会速報集 推進講座記録集	「KICK OFF」第43号 推進講座 第44号 大会特集号
大会速報	「御堂筋」32号	「まほろば」62号	「ひっしのバッチ」44号
実行委員長	榊原義夫 (35歳)	前田雅章 (49歳)	辻内俊哉 (53歳)
事務局長	黒井信隆 (36歳)	澤口雅彦 (40歳)	前田雅章 (59歳)
研究局長	上田富夫 (36歳)	牧野 満 (45歳)	安武一雄 (60歳)
財政部長	中川孝子 (32歳)	倉窪貴美江 (52歳)	倉窪貴美江 (62歳)
大会基調報告者	全国研究局長 唐木國彦 (45歳)	大阪支部 安武一雄 (50歳)	大阪支部 川淵和美 (33歳)
基調提案作成	全国常任委員会	全国常任委員会 (安武一雄)	大阪支部+丸山真司